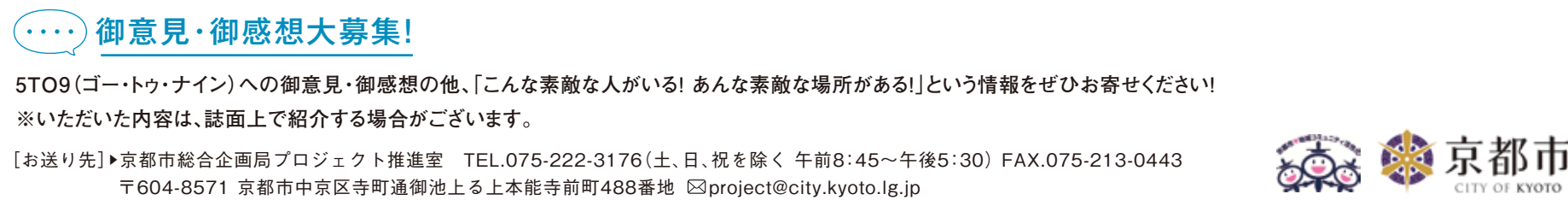




5 TO 9
KYOTO East side CULTURE JOURNAL



常に「新しい舗」として 商いに取り組む。

江戸前期の元禄年間に創業し、明治期から五条大橋の東畔で商いを続ける半兵衛麴。「当時、この近くに市場があったことから通りには弊店をはじめ、さまざまな食品卸の店が軒を連ねていたそうです。その名残りを『問屋町通』という名に見つけることができます。そう話すのは当主の玉置剛さん。初代から数えて十二代目だ。

半兵衛麴では創業から330年以上にわたり、京料理に欠かせない「京麴」をつくっている。しかし「『老舗』という言葉は使いません。弊店では「老いた舗(しにせ)」ではなく、常に「新しい舗(しんみせ)」という気持ちで商いに取り組んできたからです。いつの世にもお客さまの期待に応え、社会の役に立つために、美味しい麴をつくるという商いの本質は守りつつ、時代に先駆けた商品やサービスを追求する。その繰り返しが半兵衛麴の伝統なんです」と語ってくれた。

文化芸術のチカラで 地域を盛り上げる。

玉置さんの言葉どおり、半兵衛麴はこれまでにチャレンジを繰り返してきた。「40年ほど前、古い京町家を、店舗に再生しました。京町家のリノ

ベーションとしては、先駆的な存在ではないかと思います」。フレンチやイタリアン、スイーツなどに合う、新感覚の麴の開発にもいち早く挑んだ。「弊店には、これまでの常識には決してとらわれず、よそさんがやっていないことにもチャレンジする「唯一無二(ゆいいつむに)」を重んじる精神が息づいているんです」。

そして今年4月、本店の移転を機にギャラリーなど多目的に活用できる「ホールKeiryu」をオープンさせた。食材を扱う店では意外ともいえる展開の意図について、玉置さんはこう話す。「私は文化芸術に詳しくはないのですが、それでも絵画を鑑賞している間はとても豊かな気持ちになります。お客さまにも当店にお越しになられた際、しばし日常を離れ、文化芸術に触れる喜びを感じていただきたい。これが一つ目の理由です」。

もう一つは地域振興。「この辺りは昔ながらの住宅街で、町の人たちが集まり文化活動を楽しめる場がそれほどありませんでした。アート作品の展



半兵衛麴 第十二代当主、 玉置剛さんが語る、 舗の伝統と町の未来。



Profile | 半兵衛麴

元禄2年(1689)、宮中で製麴技術を覚えた初代玉置半兵衛が創業。明治期からは湯葉づくりも手掛ける。京料理や精進料理に無くてはならない「京麴」は、半兵衛麴の登録商標。

Profile | たまおきこう
玉置剛

昭和48年(1973)京都市生まれ。平成27年に半兵衛麴に入社し、令和4年より第12代当主を務める。

示会のほかに、地域特性を生かした焼き物教室や弊店が主催する料理講座、近隣の大学や芸術団体との連携による文化プログラムを開催することで、地域を盛り上げていきたいですね」。

住民の一人として、玉置さんはわが町についてこう語る。「近所みんなが顔見知りで、今も互いに助け合う温かなつながりが残っています。また、五条通から一歩中に入ると静かで家並みに趣があり、住むのにとてもいいところです。その一方、この辺りもご多分に漏れず高齢化が進み、今では若い人がほとんどいないんです」

5 To 9 Hanbey-Fu, the 12th head of the family,
Go Tamaoki talks about the tradition of long-established businesses and the future of the town.

Special Interview

京都市立芸術大学と Win-Winの関係に。

それだけに、近くに移転する京都市立芸術大学への期待は大きい。「芸大生のアイデアとエネルギーは無限だと思うので、京都芸大とうまく融合すればまちが活気づくと考えています。例えば古くからの行事である「五条坂陶器まつり(令和4年中止)」などで活躍してもらえるかもしれないし、弊店で展覧会を開いてもらっても面白いかもしれません。地域に若い力がどんどん集まってほしい」。実際に近所の人からも「面白いそうや」という声が上がっているという。「もっとも両者がWin-Winの関係になることが大切なので、アーティストの育成を支えるという視点を忘れてはならないと考えています。サポートした方が将来、大きく飛躍されるかもしれないと思うと、支える楽しみも大きくなりますからね」。

常に先を見据える玉置さんのアイデアは尽きない。「店舗内の壁を使って壁面アートができないかなあ、と漠然と考えています。壁には、弁慶と牛若丸、鴨川、五条大橋など、この界隈を象徴する風景を芸大生に描いてもらい、取り外しできる仕様にして、季節ごとに作品を入れ替えることができれば面白いですし、地域の魅力発信にもつながると思います。なにより芸大生の表現の機会も増えますしね」。

麴の可能性が広がることも期待している。「食をアートの素材としてとらえれば、切り口はいくらでもあります。SNSで『映える』メニューを開発



今年4月にオープンした半兵衛麴五条ビル2階の「ホールKeiryu」でのKyoto Interchanges主催「金サジ・マユンキキ・山本麻紀子」の企画展。

したり、パッケージデザインに現代芸術の要素を取り入れたり、芸大生ならではの感性を商品化できれば、お客さまにきっと喜ばれることでしょう」。

先代の思いを刻み さらなる伝統を築く。

半兵衛麴の新たな歴史を拓く「ホールKeiryu」のオープンは、先代夫婦たつての願いだった。「『お客さまや地域の人たちのために、もっといろんなことをやりたい』とよく言っていたんです。残念ながら二人とも、その誕生を見ることなく他界し



3階の「Cafeふふふん」の店内は一面ガラス張り、鴨川や五条通が眼下に広がる。天然木のテーブルやゆったりとしたチェア、ソファでくつろぎながら、お蕎麦やゆば、豆乳等を使ったお食事、スイーツ、ドリンクが楽しめる。

てしまいました」。ホールの名は二人にちなんだものという。「先代夫婦の名前からそれぞれ一文字ずつ取って「Keiryu」と名づけました。そこには二人の思いを後々まで残すという意味を込めています」。半兵衛麴の次なるチャレンジは始まったばかり。「若いアーティストの育成や地域振興の一助となるため、そして弊店の伝統を未来へつなぐため、これからも日々「新しい舗」という気持ちで商いに取り組んでいきたいと思います」。



伝統的な食文化の素晴らしさを後世まで広く伝えたいという願いから、1階には「お辨當箱(べんとうばこ)博物館」として同社蔵の古いお弁当箱が多数展示されている(旧本店改装のため、規模を縮小して展示)。



営業時間／9:00～17:00 水曜日定休
TEL.075-525-0008

アーティスト 前田耕平さんが 高瀬川で見つめ、 考えること。

アーティスト 前田耕平さん
1991年和歌山県生まれ。2017年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻構想設計修了。「紀南アートウィーク2021」(高山寺/南方熊楠顕彰館)、「六甲ミーツ・アート芸術散歩2020」(新神戸駅)、「京都芸術センターレジデンスプログラム ARTSPACE」(オーストラリア・シドニー)など国内外の芸術祭やレジデンスに参加。2021年春より南区東九条の「HAPS HOUSE」での活動をきっかけに高瀬川の観察を開始。

一匹の生き物から 地球にまで思考を広げる。

アーティストの前田耕平さんは、人と自然とのかかわりに目を向け、自身の体験を手がかりに映像やパフォーマンスなどさまざまな表現活動を行なっている。その前田さんが今、取り組んでいるのが高瀬川の観察だ。今回の取材の際も手早くウェーダー（胴長）姿になって、川に入り、慣れた手つきで川底を何度も網でさうと、ハグロトンボのヤゴ、小さなエビ、巻貝のカワニナ、その名の通り体つきが鍋のふたに似たナベブタムシを見つけていた。

「そもそもなぜ、人工的につくられた高瀬川に多様な生き物がいるのか。五条通の近くにはモクスガニがいて、七条通の南側にザリガニが多いのはどうしてだろう。カワニナはホタルの幼虫のエサとして放流されているようだが、それは誰が始めたのか。ホタルが増えるほかに、カワニナがいることで川に変化はないのだろうか。その変化が川以外の自然に影響をもたらす可能性はないのか。といったように、高瀬川を観察するといろんな疑問がわいてくるんです。一匹の生き物から人の行いや京都の環境へと思考がつながり、もしかするとそれは地球規模にまで広がるかもしれない。このようにスケールを変換しながら考えを拡大するのがとても面白いんです」。

知りたいことを 芸術以外の視点から探る。

太平洋に面した和歌山県田辺市で生まれ育ち、小さい頃から虫や魚が大好きだったという前田さん。高校の3年間はカヌー競技に熱中し、ロシアで開催されたジュニア世界選手権にも出場した。「山に囲まれた湖に独り浮かんでいると自然の中に含まれているような気がして、おのずと自然と自分とのかかわりについて考えるようになりました。芸術を意識したきっかけは、昔から記録魔みたいなところがあり、気に入った風景をデジカメやビデオカメラで撮り続けるうち、それを使って何か表現ができるかもしれないと思ったからです」。

大学は芸術学科に進んだが、「知りたいことを芸術以外の視点からも探り



たい」と思い、京都芸大の大学院では郷土出身の「知の巨人」といわれる南方熊楠（みなかた くまぐす）について研究した。「熊楠は野山を駆け回り、博物学、生物学、民俗学など多様な学問領域をまたいで知を探求した人です。ある日、森から持ち帰った菌類を顕微鏡で見ていると、その営みに宇宙規模のものが存在しているのを感じたそうです。熊楠が感じたものが京都の真ん中を流れている川にあるかもしれないし、もしそうならすごい。観察の究極の目標はそれを見つけることですね」と、前田さんは笑う。



新しい動きを起こす 「場」や「時間」を創る。

一見、前田さんの取組は表現や創作から遠いように思える。「芸術には社会を彫刻するという考えもあり、そういう意味では自分は今、世の中に新しい動きを起こす『場』や『時間』を創っているのかもしれない。その言葉どおり、

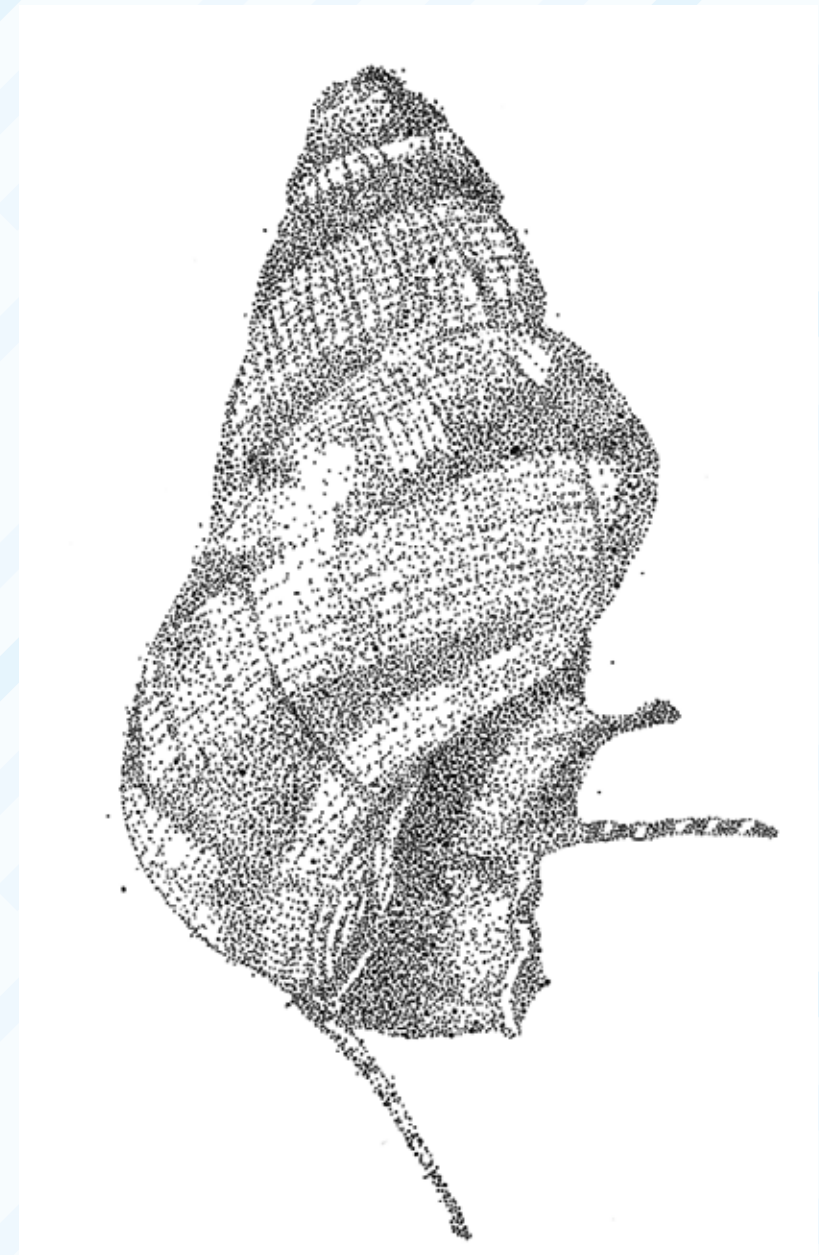
令和4年3月にこれまで高瀬川で観察してきたものを公開する「オープンラボ『かめのま』前田耕平」を東九条にある「HAPS HOUSE」で開催し、この春からは「高瀬川モニタリング部」という活動を始めた。20名ほどの部員と定期的に高瀬川を観察し、それぞれが得た発見や疑問を報告し合っている。「僕のように水棲生物（すいせいせいぶつ）を探す人もいれば、植物や鳥に目を向ける人がいたり。また、橋の上にいる人に話しかけたり、川に落ちている物に注目したりと人によって視点はさまざまなので、部員の話はすべて刺激的です」と前田さん。

部では図鑑の制作も行っている。「『高瀬川生物観察図鑑（仮）』を京都芸大の移転までに完成させたい。生物学の観点からつくられた図鑑のように生き物の姿を正確な線で表すのではなく、点描で表現しているのが特徴です。パッと見はカワニナだけど、カワニナに似たようなものなのか、水中に漂う異物なのかははっきり分らない。そんな図をととして大人も子どもも、想像を多方面に広げられるような一冊にするのが目標です」。

あたり前の 川をのぞいてほしい。

前田さんは図鑑にこんな気持ちも込めている。「今後、高瀬川の広い範囲で整備が予定されています。川の風景が変わる過渡期にあり、その間の様子を記録として残したいんです。そしていつか、図鑑を開いた芸大生が『高瀬川にはこんな景色があって、こんな生き物がいた』という発見を得ることで、自分の表現や創作の幅を広げてくれたらうれしいですね」。

最後に、こんな思いを語ってくれた。「僕は子どもの頃から海や川を見ると自然と生き物を探していました。今やっていることは、子どもの頃から変わってないんです。でも、観察をとおして思考の範囲はむかしと比べものにならないくらい広がったし、自分が川に入ると底の石が裏返り、それが良くも悪くも川に影響を与えることを常に意識して行動するようになりました。川を観察すると多くの考えが浮かび、自然の摂理を学び、世界を見る目も変わります。だからぜひ、普段あたり前に流れている、川の中をのぞいてみてください。きっと何かが見つかるはずです」。



高瀬川モニタリング部で制作を行なっている「高瀬川生物観察図鑑（仮）」に掲載予定のカワニナの点描画。



高瀬川モニタリング部のメンバーと一緒に。撮影：中谷利明

街のあの人、あの場所へ

京都市立芸術大学等移転予定地にほど近い場所で、飲食とアートが交わるお店を運営されている武蔵篤彦さん、益田藍さん。お店やアートへの思い、大学移転への期待などについてお話を伺った。

hatoba cafe



武蔵篤彦さん

お店について教えてください。

私は今年の春まで店の経営に加え、京都市内の芸術系大学で版画を教えていました。ギャラリーを始めたきっかけは、大学の卒業生やいろんな人が文化交流できるような場所がほしいと思ったことです。でもギャラリーだけでは敷居が高いかもしれないので、誰もが気軽にくつろげる場としてカフェを設けました。店のオープンは今から5年前です。

店内の雰囲気がとても素敵です。

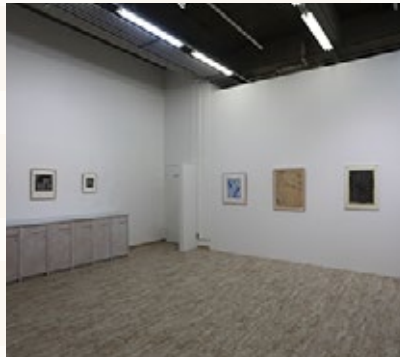
ここには以前、父が創業した染色会社の工場がありました。だから天井が非常に高くて開放的なんです。テーブルや椅子はアンティークでそろえたものの趣向がみんなバラバラで、それがかえて面白く感じています。「hatoba cafe」という店名は会社のショールームがあった神戸の「メリケン波止場」に由来しています。海の玄関口である波止場はいろんな地域や国の人が集まる交流の場でもあるので、店のコンセプトにぴったりだと思ったんです。

これまでの展示で印象的だったのは。

さまざまなアートに親んでもらえるよう、これまでに絵画、彫刻、写真など多様なジャンルの展示を行いました。そのどれもが印象に残っていますが、特に京都芸術高等学校の生徒たちによる展示をよく覚えています。イラストっぽい作品の新鮮さはもちろん、「初めての学外展示で緊張したけどそれが楽しかった」という言葉がとても印象的で何より彼らの経験になったことがうれしかったです。現在はコロナ禍の影響もあり企画展は行わず、版画作品の常設展示を行っています。



版画作品を中心に常設展示を行うギャラリー。



天井が非常に高く開放的なカフェ。

版画や陶芸の制作工房もあるそうですね。

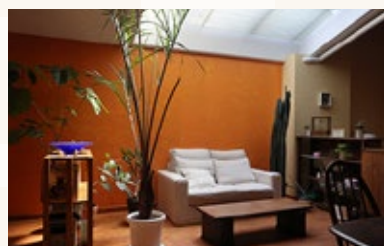
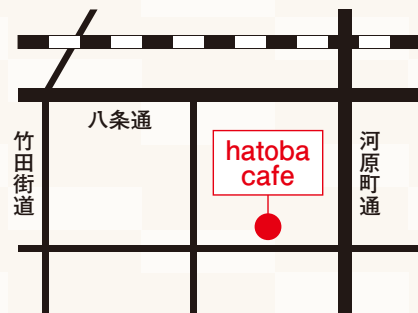
ギャラリースペースの隣には版画や陶芸の工房を設置しており、私を含め作家の方々が創作活動に取り組んでいます。コロナ禍までは、そこで版画を体験できるワークショップを年に数回実施していました。現在でも少人数で週1回の版画教室を続けています。また、年に1〜2回、作家の手作り工芸品の販売などのバザールを開催し、子どもからご年配の方まで地域の皆さまに楽しんでいただけていました。京都芸大が移転してきたら、こうした地域の方々にも参加いただける取組も増やしていきたいですね。

京都芸大の移転に期待することは。

移転を機にほかの芸術系大学を巻き込み、京都に新しい波を起こしてほしいですね。京都市内には京都芸大を含め5つの芸術系大学があります。東京と同レベルの数ですが、人口比率で考えると、京都の文化密度が非常に高いという証しだと考えています。今後、京都の文化力をさらに高めるために京都芸大が求心力を発揮し、各大学がそれぞれの持ち味を発揮できるようなイベントを開催すれば面白いのではないのでしょうか。

芸大生にメッセージをお願いします。

京都芸大ならではの取組で周辺地域を盛り上げてほしいと思います。京都市内の芸術系大学で音楽学部があるのは京都芸大だけなので、その利点を活かして近くの施設で美術展とコンサートを同時開催したり、学生がつくった音楽を美術展の会場に流したりと芸術の魅力を一度で二度楽しめる機会を創出してほしいですね。多くの方に芸術に親んでもらうには敷居が低いことが重要です。ギャラリーやコンサートホールを敬遠する方も、地域の施設なら気軽に足を運べると思うのです。もちろん当店を利用していただいても構いません。音楽イベントをやりたいと常々考えており、芸術で地域を盛り上げるのは私も望むところなので「われこそは!」と思う芸大生はぜひ一度店に来てください。

営業時間／11:00〜19:00 木曜・金曜休
TEL.075-644-9152

カモガワ アーツ&キッチン



益田藍さん

お店について教えてください。

近くに京都芸大が移転してくること、そして自分も芸術系大学の出身ということもあり、従来の飲食にアートをプラスした店をつくろうと考え、令和2年(2020)11月にオープンしました。お客さまに挽きたてのコーヒーや全国から選りすぐった日本酒、お食事を楽しみながらアートを身近に感じてもらえるよう、独立したギャラリースペースを設けるのではなく、テーブルやカウンターのすぐそばに作品を展示しています。歩道からガラス越しに中が見えるため、前を通りがかった子どもが「あれ何?」といいながら店にふらっと入ってくることもよくあります。

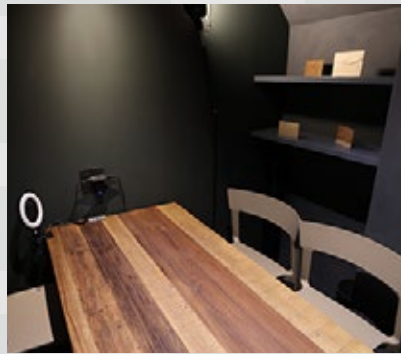
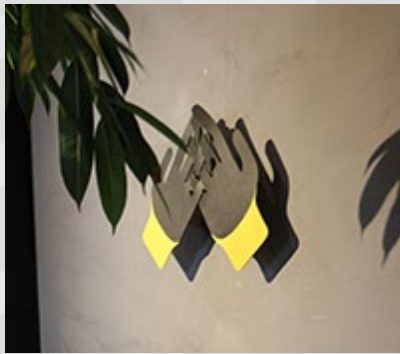
どんな作品を展示しているのですか。

絵画、立体作品、彫刻などさまざまな分野のアーティストの個展を開催しています。友人に京都芸大出身者が多く、そのつながりもあり、これまでの個展はすべて京都芸大出身のアーティストによるものです。今年の春から夏にかけては、アーティスト藤澤信輔さんの「ダブル・スタンダード」をテーマに、見た目と本質とのズレをユーモアを交えて表現した立体作品を展示していました。



展示とのコラボメニューもあるそうですね。

例えば「ダブル・スタンダード」なら、一見プリンのようにけど実はパイナップルシャーベットといったスイーツを提供し、大変好評をいただきました。作品鑑賞が目的ではないお客さまにもアートに親しみを持ってもらえるきっかけになると思いますし、こうした取組をととして展示の意図やその楽しみ方を伝えるようにしているんです。



飲食を楽しみながらアートが身近に感じられる、テーブルやカウンターのすぐそばに展示される作品。藤澤信輔さんの作品展示は令和4年(2022)8月まで。

展示以外のイベントはありますか。

展示に合わせてアーティストのトークイベントをやっています。陶芸やガラス工芸など日本各地の作家が手掛けた工芸品を扱っているので、今後はそういった作家を招いてワークショップが開催できればいいと思います。芸大生には教室で学ぶのとはまた違った自由な視点から、創作に取り組んでもらえるのではないのでしょうか。

京都芸大の移転に期待することは。

大学ができて終わりではなく、芸大生が大学周辺の地域に溶け込み、そこから新しい何かが始まることを期待しています。この辺りには鴨川に近いので、例えば灯籠流しを地域のひとと芸大生と一緒に始めてみるとか。灯籠のデザインを担当してもらえば芸大生にとって表現の機会にもなりますよね。

芸大生にメッセージをお願いします。

学生時代にアートの香りがするカフェで友だちとよく時間を忘れて過ごしていました。大学の近くには大抵そんな止まり木のような場があるので、芸大生にとってこの店がそういう存在になればうれしいですね。また、ここには京都芸大出身の方もよくお越しになり、皆さんコーヒーやお酒を片手に、ときに激しくアート談義に花を咲かせているんです。そういった「先輩」たちが醸し出す熱気に触れるのも刺激になると思います。私もスタッフも京都芸大の移転をとても楽しみにしていて、芸大生のチャレンジをいろんなかたちで応援したいと考えています。

営業時間／11:00〜20:00 火曜休
TEL.075-746-3234